

日本緩和医療学会 Vol.110

ニューズレター

◆◆◆
Feb.2026



特定非営利活動法人
日本緩和医療学会
Japanese Society for Palliative Medicine

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8 日栄ビル603B号室
E-mail: info@jspm.ne.jp URL: https://www.jspm.ne.jp/

主な内容

巻頭言	49
よもやま話	50
委員会活動報告	53

巻頭言

将来構想委員会の取組

国立がん研究センター中央病院 緩和医療科
里見 絵理子

日本緩和医療学会の会員の皆様には、日頃より多大なるご支援とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。私はこの度、初めて将来構想委員会委員長を務めさせていただくことになりました。どうぞよろしく申し上げます。

当委員会では2024年8月より、学会が時代の要請に応え、社会的責任を果たすための具体的な方策を検討してまいりました。対面およびWebでの集中的な議論を経て、現状の課題抽出と対策の立案を行っております。現在着手している主な取り組みは以下の通りです。

1. 組織体制の最適化と学術活動の促進

複雑化した委員会組織を整理し、学会内外にわかりやすく、社会の動向に対応できる機能的な体制への刷新を目指して検討を開始しました。

・SIG (Special Interest Group) の導入：2025年夏の日本緩和医療学会会員および学術大会参加者向けの調査により、多様な専門性を持つ会員が能動的に参画できる学術活動への強いニーズが確認されました。これを受け、学術活動のさらなる活性化を目的とした「SIG管理運営委員会」の設置を理事会で決定し、現在準備を進めています。

・名称変更と新委員会の設置：WGやWPGといった組織名称をより分かり

やすいものへ変更するとともに、「医療DX」や「ダイバーシティ&インクルージョン (DE&I)」を推進する委員会の新設を検討しています。

2. 外部連携の強化とデジタル化への対応

・厚生労働省との人事交流：緩和ケア施策との緊密な連携を目的として、「日本緩和医療学会と厚生労働省との人事交流」について当委員会より提案しました。2025年5月に募集し、2026年度より1名の人事交流が開始されます。

・医療DXの推進：急速なデジタル化を見据え、緩和医療領域におけるDXの活用は必至であることが推測されるため、理事・代議員向けの勉強会を企画し、会員の皆様にも情報提供できるようにしたいと考えております。

3. 未来に向けた継続的な議論

このほかにも「患者・市民参画 (PPI)」の推進、「緩和医療従事者不足」への対策など、取り組むべき課題は多岐にわたり議論が尽きません。

「どこに住んでいても、どのような病であっても、誰もが適切な緩和ケアを受けられる未来」の実現に向け、将来構想委員会では会員の皆様と共に立ち止まることなく考えていきたいと考えております。ご支援ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

よもやま話



能「清経」―自ら海に沈んだ平家の公達―

聖マリアンナ医科大学 緩和医療学講座 橋口 さおり

家と病院の往復で終わる毎日の中、唯一の趣味ともいえるのが能楽です。演目は古典文学を基にしたものが多く、日本人の心の根幹に触れる機会にもなっています。鑑賞だけでなく、年1回、能面をかけて能楽堂の舞台に立っていますが、美しい姫君が登場する源氏物語よりは悲劇が好みで、これまでシテ（主役）を演じた8番のうち3番が平家物語でした。そして今年は「清経（きよつね）」に挑戦しています。演じるときにイメージがつけやすいように、できるだけ物語の史跡を訪ねるようにしていますが、今年は大分県の柳ヶ浦に行ってきました。



柳ヶ浦の清経供養塔



宇佐神宮

「清経」は、平家が源義仲に追われて都落ちしたものの勢力を保っており、安徳天皇を奉じて九州で立て直しを図っていた頃の物語です。清経は、清盛の長男、重盛の息子で、都では笛の名手として知られていました。舞台は、清経の帰りを待つ妻（ツレ）のもとに清経の遺髪を持って従者（ワキ）がやってくるころから始まります。戦の前に入水自殺したと聞いた妻は遺髪を受け取ろうとしますが、枕を涙で濡らしながら夜を過ごしていると、そこに清経の亡霊（シテ）が現れます。亡霊は「つらいと思った世も夢のようで跡形などないと悟ったつもりでも、娑婆への道を辿ってしまう心は儂いものだ」とつぶやきながらぼんやりと現れ、妻に「なぜ形見を突き返したのだ」と語り掛けます。妻は「夢で会えたのはありがたいが、一門の行く末も見ずに自死したのはつまらぬことではないか」と返します。そこで清経は自死した理由を語り始めます。

大宰府の国主に裏切られた平家一門は、取るものもとりあえず小舟に乗って豊前の国の柳ヶ浦に逃れます。そこに仮御所を造り、宇佐八幡宮（八幡宮の総本社）に金銀財宝を持って神の加護を願いに参詣するのですが、神託は実に残酷なものでした。「世の中の / 宇佐には神もなき物を / 何祈らん / 心づくしに（乱れた世の憂さには平家を助ける神などないというのに何を懸命に祈るのだ）」。一門は力を落とし、すごすごと引き上げました。以来、白波や白鷺も源氏の旗かと怯える有様。清経は、どうせ死ぬ身、いつまでも憂き目を見るよりはと、月が美しい夜に船を漕ぎ出します。頃は秋。都の紅葉が散る有様を思うに、今の寂しさは耐え難い。月を眺めるふりをして舳先に立ち、横笛を吹き鳴らし、今様（謡の一種）を謡います。栄華は帰らず世に思い残すこともない。身を投げれば狂人と思われる

かもしれないが、どうせ仮の世、西に傾く月に向かって南無阿弥陀仏の一声を最期に海底に沈みます。享年 21 歳でした。死後は修羅道（戦い続け苦しみと怒りが絶えない世界）へ堕ちて苦しみますが、最期に唱えた南無阿弥陀仏の功德で成仏します。しかし、妻との気持ちのすれ違いは埋まらないまま物語は終わります。

後半の語りから入水までの心持ちは舞で表現します。「月の扇」や「笛」の型など印象的な所作や、舞台上をさまようかのように巡る中にも清経の迷う心が感じられ、舞っていても胸がつぶれそうになります。最期は合掌しながら拍子（足で床を踏み鳴らす型）を 13 回も踏んで、意を決するように海に飛び込むのです。

日頃、亡くなっていかれる方々とお話をするなかで、科学では割り切れない心の機微に触れる機会が多くあります。死のありかたは様々ですが、絶望の先に死を選ぶ心に罪はあるのか。戦ってほしかった妻の気持ちも理解できなくはないのですが、強いてよいのか。そんな気持ちに占拠されそうになりながらのお稽古です。本番は 3 月。一心に励みたいと思います。



推し活と緩和ケア

あけぼの薬局メディカル店 坂本 岳志

突然ですが、皆さんに「推し」はいますか？

最近テレビでも取り上げられる推し活ですが、推し・推し活とは、特定の人物・キャラクター・コンテンツを生活の一部として継続的に応援する行為で、昔のファンとは違い、関係性の実感を重視しているようです。複数の民間調査では、日本人の約 3～4 割が何らかの推しを持っており、若年層では 5 割超、10 代においては約 6 割という結果もあるようです。

という自分も、若い頃より女性アイドルを推していますし、女性職員の半数以上に推しがいたり、連携先の医師や看護師にも推しがいたりして、よくお互いの推しの話で盛り上がることもあります。

推し活と緩和ケア。一見すると全く交わらなそうな世界ですが、最近、その精神は案外よく似ていると感じています。推し活をしている人は、「推しを成功させたい」「少しでも力になりたい」と思っています。でも実際にできることは、現場に行く、声援を送る、グッズを買う、ただ見守る——それくらいです。推しの人生そのものを代わってあげることはできない。推しの苦悩や不安を引き受けることも、つらい練習を代わることもできない。ただ「そばにいる」「応援している」という姿勢を示すことしかできません。

緩和ケアも同様で、痛みや苦しみをゼロにできることは正直少ない。病気を治すことが目的ではない場面も多いです。医療者は、患者さんの人生を代わって生きることはできませんし、死を引き延ばすことだけが正解でもありません。それでも、「あなたは一人じゃない」「あなたのしんどさをちゃんとみている」という態度を示し続ける。それが緩和ケアの核だと認識しています。

推し活の世界では、「現場に行くだけで意味がある」「会えなくても同じ空間にいることが大事」とよく言われます。緩和ケアでも、「何かしてあげなきゃ」と焦るより、「一緒にいる」「話を聴く」「沈黙を共有する」ことのほうが、結果的に患者さんを楽しませることがある。この感覚は、両者に共通していると感じています。

また、推し、特にアイドルには「終わりが来る」ことをどこかで分かっています。卒業、解散、活動休止。だからこそ、今この瞬間を大切にします。緩和ケアも同じで、「時間には限りがある」という前提のもとで、その人にとっての「今日」をどう穏やかに過ごすかを考えます。

さらに面白いのは、推し活は決して“自己犠牲”だけではない点です。推しを応援することで、自分が元気になる、救われる。緩和ケアも、患者さんや家族のための医療でありながら、関わる側が「人として大切なもの」を教えられる場面が多く、支える側が実は支えられていることを実感されているのではないのでしょうか。

自分が以前担当した患者さんですが、70代の胃がん末期の板前さんでした。退院後は自分の店の板場に立ち、若い料理人に指導したいと言っていました。24時間中心静脈栄養（TPN）も実施しており、体力的にも板場に立つのは難しいと思っていましたが、年末の忘年会シーズン、彼はTPNバッグを背負って5時間以上板場に立ち、誰よりも大きい声で仕切っていたのを覚えています。その姿を見て、自分もこうありたいと思ったものでした。まあ友人に話をしたら、「すでにTPNの箱を背負って患家訪問しているでしょ」と茶化されましたが。

ちょっと前までは、推し（緩和）の現場といえば棒状のペンライト（モルヒネ）だけでしたが、今ではさまざまな形状のペンライト（モルヒネ以外のオピオイド）や、うちわ・ぬいぐるみ・アクリルスタンドなど、さまざまな応援グッズ（鎮痛補助薬等）が発売されており、推し活の仕方によって使い分けされています。また、推しといえばアイドルなどの人物（がん患者）が主でしたが、最近ではVTuberやゲームキャラなどの二次元や創作物など（心不全や呼吸器疾患など）、その対象は広がりを見せています。在宅緩和ケアに関わる身としては、推し変なく最終公演まで伴走できるよう心がけたいと思っています。

「治せなくても、意味はある」

「直接役に立てなくても、価値はある」

この感覚を自然に理解している人は、実は良い緩和ケアマインドを持っていると思います。だから、もし誰かに「推し活なんて無駄じゃない？」と言われたら、こう返してもいいかもしれません。

「無力なときに、どう寄り添うかを学んでるんです」

1. 日本緩和医療学会第7回関西支部学術大会開催報告

第7回関西支部学術大会
大会長 清水 政克

日本緩和医療学会第7回関西支部学術大会は、2025年9月20日、神戸市中央区のラッセホールにおいて開催されました。本学術大会は「いま、あらためて2025年問題を再考する」をテーマに掲げ、関西圏を中心に医師、看護師、薬剤師、医療ソーシャルワーカー、心理職など多職種の医療従事者が参加し、活発な学術交流が行われました。後日オンデマンド配信を含めると約700名を超える参加申込みとなり、大変盛会に終わることができました。この場をお借りして、ご支援を賜りました皆さまに心より感謝申し上げます。

大会の内容としては、関西支部開催ならではの魅力を高めるべく多彩なプログラムを企画しました。その結果、一般演題登録などが増加し、3列開催であった当初の予定が最終的には最大5列での運用となりました。また、積極的にSNSやYouTube等を活用して広報を行い、緩和医療学会YouTubeサイトでの紹介動画は2ヶ月で400回超の視聴を得ることができました。また、大会当日は「楽しく学べる学会」をテーマとして運営に取り組み、座長等にも積極的に若手を登用いたしました。一般演題では、臨床現場での工夫や研究成果が数多く発表され、質疑応答を通じて日常診療に直結する知見が共有されました。参加者からは「他施設の取り組みを知ることができた」「明日からの実践に生かせる内容だった」といった声が多く寄せられました。参加者の事後アンケートにおける全体的な満足度も「非常に満足」「満足」をあわせて83.3%と高い評価を得ることができました。

本学術大会を通じて、緩和医療に携わる専門職同士のネットワークがさらに強化され、関西地域における緩和医療の質向上に寄与する有意義な機会となったのではないかと考えております。今後も本学会が、患者・家族のQOL向上を目指した学びと交流の場として発展していくことを期待しております。

2. 第7回東海・北陸支部学術大会開催報告

第7回東海・北陸支部学術大会
大会長 石黒 崇

2025年9月20日にじゅうろくプラザ（岐阜市）にて、第7回東海・北陸支部学術大会を開催しました。本大会には、会場定員340名を大幅に上回る501名（会員242名、非会員259名、うち学生25名）が参加し、盛会のうちに終了しました。

大会のテーマは「緩和ケアを広めるために、今できること」と掲げ、日頃緩和ケアに従事している専門家だけでなく、非専門の医療・福祉従事者にも気軽に参加できることを目標にプログラムを立案しました。指定演題は7セッションで19演題、一般演題は38演題と数多くの演者が登壇し、各会場で活発な質疑応答が行われました。プログラムは、緩和ケアに必要なアセスメントを振り返るための教育講演、時代の流れに逆行しているのかもしれませんが、「看護師（薬剤師）による看護師（薬剤師）のための企画」のような「職種別」のセッションを企画しました。加えて、ここ数年関心が高いアドバンスケアプランニングのシンポジウム、緩和ケアの均てん化という面では課題の多い「地域医療と緩和ケア」のワークショップ、参加者参加型の症例検討会を開催しました。特別講演は、3会場全てをオンラインで繋ぐことで、400名を超える参加者が立ち見なく快適な環境で、貴重な講演を聴講することが可能となりました。共催セミナーは、この厳しい時代環境の中で3社の支援を受け、岐阜の食材で作った弁当をランチョンセミナー参加者全員に提供しました。なお、ポスター（チラシ）は、「チラシを見て参加を決めた」というご意見がある程、参加者から高評価でした。台風を含めた自然災害、大幅な参加者増の状況の中、狭小会場で運営できるかという事前の心配もありましたが、当日は晴天で、大きなトラブルもなく大会を終了できたことは、大会に参加しご支援いただいた皆様のご協力の賜物と感謝しております。

次回、第8回東海・北陸支部学術大会は、2026年10月3日に金沢市文化ホール（金沢市）にて、石川県済生会金沢病院 龍澤泰彦先生が大会長のもと開催される予定です。富山大会に引き続き、2回目の北陸地区での開催になります。大会の成功と更なる

発展を祈念いたしますとともに、また皆様とお目にかかれることを楽しみにしております。

最後になりますが、本会の開催に際しご支援いただきました、緩和医療学会 東海・北陸支部の代議員・会員、座長・演者、大会実行委員・運営委員、協賛企業および関係者、緩和医療学会事務局、そして大会にお越しいただいた参加者の皆様に、この場をお借りして、改めて心より御礼申し上げます。

3. 第7回関東・甲信越支部学術大会を終えて

第7回関東・甲信越支部学術大会
大会長 坂下 美彦

第7回関東・甲信越支部学術大会を2025年10月18日(土)に幕張メッセ国際会議場にて開催しました。大会テーマは「これからの緩和医療—変わるものと変わらないこと—」とし、参加者は計548名(会員317名、非会員221名、学生10名)で盛大に終わることができました。

本大会の特徴としては、ご高名な先生の特別講演や招聘講演は行わず、指定演題は「多職種が参加しやすいこと」「初学者が学べること」「若手が登壇できること」の三つを重視して企画したことです。その結果、多職種対象のシンポジウム4題、教育講演4題、事例検討(失敗事例あるある)4事例、TIPS19題と充実したプログラムになりました。TIPSは廣橋猛先生のご尽力で19の興味深いテーマと演者が選ばれ、若手の有望な先生方の登壇の機会となりました。TIPSの会場は常に満員の状態でした。失敗事例の検討会では活発な意見交換がじっくり行われ、支部大会ならではの良さを感じられました。

一般演題は、当支部過去最多の62演題のポスター発表が行われました。発表の内容は多岐にわたるものになり、ポスター会場では発表時間に限らず多くの人の姿が見られました。

会場の部屋は大きなホールは借りずにアトリウムを囲んだ1フロアの4つの中会議室で行いました。部屋の広さは丁度良く、動線もコンパクトでアトリウムでは活発な交流が行われました。支部大会として理想的な会場設定でした。

今回、多くの参加者がありましたが収支は赤字となっており、その大きな要因の一つは共催セミナーが1社しか得られなかったことです。近年、企業からの共催を得るのが難しい状況があり、今後の資金集めが大きな課題と思われました。

最後に実行委員の皆様、関係者の皆様、発表や登壇を頂きました先生方、参加者の皆様に厚く感謝申し上げます。次回第8回関東・甲信越支部学術大会は2026年10月4日(日)Gメッセ群馬(田中俊行大会長)で開催されます。

4. 日本緩和医療学会第7回九州支部学術大会 開催報告

第7回九州支部学術大会
大会長 吉武 淳

日本緩和医療学会第7回九州支部学術大会を「つなぐ命 高めるスキル 広げる可能性」というテーマのもとに、2025年10月19日(日)に熊本市の熊本城ホールにて開催させていただきました。時々曇ることがありましたが秋晴れのもと、医師、薬剤師、看護職、心理職、ソーシャルワーカー、介護職など、九州圏内から約600名の参加を得て盛会のうちに終了できたのは、何よりも参加していただいた皆様のお陰です。

多職種が関わる緩和ケアを念頭に、プログラムは医師や看護師以外のご講演を複数取り入れ、ポスター発表にも口演の時間を設けました。特別講演は、「現場実践に活かす『臨床倫理』の考え方—緩和的鎮静をめぐる『倫理的ジレンマ』を中心に—」と題し、宮崎大学医学部社会医学講座生命・医療倫理学分野教授の板井孝壱先生に緩和ケアに従事する我々にとって関心が高い日常診療での倫理的な考え方を教えていただきました。その日の最終講演でしたが、聴講者が最後まで熱心に耳を傾けていたのが印象的でした。その他に2つのシンポジウムと4つの教育講演を行いました。開催後アンケートをみてオンデマンド配信を考えれば良かったと反省しています。計68題の一般演題の発表(口演24題、ポスター44題)が行われましたが、いずれの発表も日常の現場から生まれた工夫と学びにあふれており、活発な質疑応答が展開されました。

また、本九州支部学術大会では初めての試みとして抄録集の冊子化を止めてPDF配布のみとしました。共催セミナーはランチョンなしでの講演とし、昼食は事前申し込みのお弁当か、SAKURA MACHI Kumamotoでの飲食とさせていただきました。熊本城ホール内ではWi-Fiの接続も可能です。また、一部の会場は実行委員会のメンバーのみで当日のプログラム運営を行いました。参加者やご発表いただいた方々には昨年と異なる運営に違和感や不快感を持

たれたかと思いますが、何卒ご容赦ください。今回のテーマにあるように、様々な職種が医療・看護・介護の垣根を越えて症状の予防や緩和を通じて「命をつなぎ」、我々はそのために必要な「専門的知識とスキルを習得」し、人々の幸せや生き甲斐を「広げる可能性」に結びつく集いになったのであれば、実行委員一同、望外の喜びです。本会で得られた学びとつながりが地域を支える力となり、緩和ケアのさらなる発展につながることを心から願っております。

謝辞：本学術大会の開催にあたり、多大なるご尽力を賜りました関係各位に心より御礼申し上げます。特に、日本緩和医療学会事務局長・近畿中央呼吸器センターの所 昭宏先生、事務局の小林温子様をはじめ、日本緩和医療学会九州地区代議員および九州支部 WPG 員の皆様、第7回九州支部学術大会実行委員や運営スタッフの方々のご協力をなくしては、円滑な会の進行は成し得ませんでした。準備段階から当日の運営に至るまで、献身的なお力添えをいただきましたことに深く感謝申し上げます。また、座長・講師としてご登壇くださいました先生方、ならびに一般演題でご発表いただいた皆様にも厚く御礼申し上げます。多大なるご支援およびご協賛をいただきました団体・企業の皆様にも心から感謝申し上げます。本学会が盛会のうちに終えることができましたのは、皆様のお力添えの賜物でございますが、最も活躍していただいたのは高野病院の鳥崎哲平先生であることを申し添えます。ここに改めて深く感謝の意を表し、今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

5. 第6回東北支部学術大会を終えて

第6回東北支部学術大会
大会長 井上 彰

2025年10月25日(土)に、宮城県仙台市のフォレスト仙台にて第6回東北支部学術大会および第28回東北緩和医療研究会が開催されました。幸い好天にも恵まれ、東北各地より235名のご参加をいただきました(うち学生、研修医は、今回参加費を無料にしたこともあり計12名が参加しました)。

午前中の一般演題では計24の演題が寄せられ、うち4名を優秀演題として閉会式の場で表彰させていただきました。また、教育講演1として東北大学大学院文学研究科の谷山洋三先生より「スピリチュアルケアはいつから必要か?～がん患者になって感じたこと～」、教育講演2として宮城大学看護学群小児看護学分野の名古屋祐子先生より「コミュニティ型こどもホスピスの必要性と宮城こどもホスピスプロジェクトの挑戦」を賜り、貴重な学びを得ることができました。仙台ペインクリニック伊達久先生によるランチョンセミナー「がん患者とがんサバイバーにおけるオピオイド鎮痛薬の使い方」を経ての午後の企画では、今回が最終回となる東北緩和医療研究会の総会において、MY wells 地域緩和ケア工房の神谷浩平先生より特別講演「緩和ケアの歴史が語るもの～死にゆく人と支え合いの原点～」と、やまと在宅診療所名取の中保利通先生から同研究会の歴史をまとめた特別発言を賜り、閉会宣言にて同研究会の30年近くにおよぶ長い歴史に幕を下ろしました。参加者一同で、これまで東北地区の緩和医療の発展に尽力されてきた多くの先達に敬意を表した次第です。

今回の大会テーマである「想いをつなげる」のとおりに、その後はシンポジウム「東北の緩和医療の未来を語ろう」において、各領域で活躍している若手会員が講演し、最後に当方が市民公開講座「市民から広げよう!診断時からの緩和ケア」で、緩和医療の普及啓発への想いを述べさせていただきました。至らぬ点多かったかと思いますが、大きなトラブルなく会を終了できて大会長として肩の荷が下りた次第です。次回は、2026年10月17日(土)に鴻巣正史先生を大会長として、第7回東北支部学術大会が盛岡で予定されております。同会の成功を心よりお祈り申し上げます。

編 | 集 | 後 | 記

第108号をもってJournal Club、Journal Watchが終了してしまったことに驚かれ、残念に思われた会員（読者）の方々は少なくないはずである。両企画は、長年にわたって、海外のジャーナルで公開された緩和医療（ケア）に関する最新の情報を会員に提供してきた。英語が不得意である、専門性の高い情報を得ることが困難であるなどの会員にとってはとても重要な情報源であったはずである。両企画の終了は、ニューズレターにおける海外の最新情報の提供を中止するものではありません。両企画の終了は、時代の流れと共に会員のニーズ（特に本会が様々な職種の会員が参集していること）が変化していること、また、情報収集の方法が多様化してきたことが背景にあり、今後情報提供を中止することが決定されたというものでありません。現在、ニューズレター編集委員会を中心に理事会でも、今後の情報提供のあり方が議論されており、新たな形での情報提供が再開されるものと期待しています。（山口 重樹）

小早川 誠
坂本岳志
武村 尊生
○橋口さおり
部川 玲子
細矢美紀
山口重樹
山田圭輔
吉武 淳